でっかい愛を見せるとき！

フィロト・シプレ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
でっかい愛を見せるとき！

【Ｎコード】
Ｎ７００２Ｑ

【作者名】
フィロト・シプレ

【あらすじ】
ある国の女王補佐：ソートレイナはものすごい素質を持った人を勧誘するためゴーストハウスに向かいました。
ゴーストハウスの主晴彦は対人恐怖を思わせる、しかし素質はものすごい。
ソートレイナは対人恐怖だった知り合いとのやりとりを思い出して晴彦をいやし、勧誘する。

木造建築がちらほらある農村、ところどころ牛や農夫がいる平和な地域にやって来た。
ここにとんでもない才能を持った奴がいるらしい。女王補佐である私が直接勧誘するほどの奴が。
それにしてもこの村、都会から来るのがよほど珍しいらしい。はげたじいさんがにやにやしながら話しかけてきた。
目的を話すと顔だけでなく頭までが青くなっていた。
「ソートレイナ様、本当に行くんですか？　あそこはお化けだらけですぜ？」
文明の光がない地域ではお化けとか悪魔を本気でおびえるようだ。
わたしも完全に楽観していたわけじゃない、危険な奴なら村ごと避難させねばならんので、斥候を使っていろいろ調べた。
人間だけでなくそこらに漂ってる精霊やお化けに聞き取り調査もする。
結果はまったく誰にも被害はなく、争いの気配はない。
このゴーストハウスは不気味がられているが、お化けによる情報収集は強力だ。多くの権力者が情報収集を依頼し目的をかなえていたらしい。
権力者から見ればお宝にしかみえない。
そして人間の友だちをほしがってるとも聞いた。勝算は１００％だ。
しかし人との交流が少ないのなら即戦力は無理だね、一番信頼できる学校に特別入学させるのを目的とする。成長したら私の右腕になってくれるだろう。
こみ上げてくる笑いを抑えたあと、じいさんの肩に手を置いて宣言した。
「大丈夫さ、どんな怖い悪魔も権力者には勝てない」

冗談っぽく言ったのだが効果はないらしい。聞こえてないのを承知であいさつするとゴーストハウスに向かった。
空を飛ぶとシルクのマントと髪がなびく、吸血鬼なら一瞬で解けるほどの天気で熱い。地面は草原を切り分けた砂道と岩と立派な田舎道だ。
あるくと服が汚れるけど飛べば平和な景色を満喫できる。

ゴーストハウスまでは地図にすると直線だ、主だけは人間らしい。
そして、おそらくその人間だろう。魔力センサーで見ると太陽を虫眼鏡で見るようにかがやく存在がいる。魔王でも泣いてにげる魔力だ。
その力を使っても隠してもないから使えてないのだろう。
周りのお化けは様々な強さの奴がいるね。
一般人クラスから伝説の英雄がお化けになりましたクラスまで様々だ。
彼らの住むゴーストハウスは青いオーラに覆われた館だ、魔法を使えなくてもみえるほど滲み出してる。館にしてはたいした大きさではないが綺麗に掃除されてる。
館の周りの木々も手入れされながら大きく育っている。樹齢８０年の魔力だが幹は直径９メートルもある。
しかもオオカミとウサギがじゃれ合ってたりと人間以外には好かれている。ここの主は評判通り平和そうだね。

館まであと１０メートルぐらいまで寄るとお化けがちかよってきた。おおざっぱに言うと”歳上の幼なじみ系ヒロイン”という容姿の女だ。
ちなみにこいつも”伝説の英雄がお化けになりましたクラス”だ。
女は笑顔でふわふわ飛んでくる。相手の心から笑顔を引き出すほど明るい笑みだ。
「あら、こんなところにめずらしいわね。迷子になっちゃったの？」

「いや、館の主と友だちになりに来た。今はどうされてる？」
「えっ？」
なぜ困惑する？
”むっ！　怪しい奴！”って警戒されるのならわかるが、別の事情がありそうだ。もしかして病気だったか？
少女は両目を上向いた皿みたいな形にして考え込む。鳥がすり抜けて行くも気にしてないようだ。
大人しく少女を待つことにした。
煙草吸おうとしたら雀っぽい鳥が回り始める、しぶしぶ中断して人差し指をだすととまる。
そのままにしていると、他の鳥までやって来た。どうやらここは禁煙らしい、煙草をしまったあと軽く手を上げると鳥たちが飛んでいった。
数羽が同時に飛んでいくと結構良い景色だ。
鳥を見送るとようやく少女が目を開けた。
「あなた、お化けとか大丈夫？」
「だからここにいるんじゃないか」
「あはは！　そうだよね！」
この地域ではそんなに怖がられてるのか。この少女だけでも暴れれば村が壊滅するレベルだし当然ともいえる。
私の方が強いけどね。
不安はそれだけじゃないらしい、まだ表情は暗いな。
「ここの主、恐がりだから失礼な反応しちゃうけど大丈夫？」
「ああ、そういうタイプも結構慣れてる」
恐がりで失礼な反応、知り合いの対人恐怖がよくやってるね。自信満々に言うと少女はすごく安心したらしい。さっきのかがやく笑顔にもどった。
少女は魔法を使って仲間たちに指令を送ると主っぽい魔力が動き出す。
「さ、客間に案内するわよ」

「ありがとう」
と言うのは良いが壁の中をすり抜けていった。私が突っ込んだら大理石ごと破壊してしまう。
しぶしぶ手間のかかる空間転移魔法で屋敷に入った。
「ごめんね、お化けの癖でつい」
少女はウィンクしながら舌を出した。
「大丈夫さ」
お化け相手も慣れてる、来るまえも話したばっかりだからね。
ゴーストハウス、と言われているがいつ人間が来ても良いように掃除されていた。
名前のわからない上質の絵が４点壁にあり、２つあるドアと窓の両脇にアマリリスやバラが飾られている。
ほんのり赤い壁、大理石の床、上にはシャンデリア、ベージュのソファーなどセレブにしか用意できない家だ。少女に勧められるまま腰をかけ家主を待つ。
困ったことにパッシブスキルであるデビルイヤーが発動してしまったようだ。
少女と中性的な声が言い争ってる。中性的な声はおびえていて、少女が必死に私に会わせようとしている。
少し時間かかりそうなのでマントをおいてから読書することにした。
ベージュの布シャツにタイトジーンズというラフな格好だ。本を読む知的な美女を演出するためゆったりと腰をかけ、背筋を伸ばす。
この魔法で作り出した本はいくらめくっても最後まで行かない、そして通常の本数億冊文のデータが入るハイテク製品だ。
魔法で命令送ると見たい部分に飛ぶので、対人恐怖について復習してみた。
”対人恐怖の人は人間関係でトラウマがあることが多いです。新たな出会いに対してもトラウマが邪魔をして積極的になれません。
ではどうすればいいでしょう？

大きな愛を見せることでだんだん心を開いてくれます。
少し時間かかりますが一番確実な方法です、絶対押しつけはダメですよ”
との事だ。
ちなみにこれは知り合いの対人恐怖克服者が書いた自費出版のエッセイだ。この本を読むと似たような症状を持った相手に対面したとき笑顔でいられる。
すごく参考になるので全３０００ページを速読で２周できた。
６７００ページ目を見ている頃にドアが開き、女の顔をした少年が立っていた。
女装して美女コンテストに出たら優勝できるほどかわいい。身長は栄養豊富な国の成人男ぐらいだ。上は布のシャツで下は布のズボンで色はどっちも白。
どうやらおしゃれに興味ないようでもったいない。
華奢な体はぶるぶると震え、顔もおなじようにおびえている。
ここは私から声かけた方が良いな。
席を立つと笑顔でお辞儀すると少し表情が和らいだ。しっかり目を見る。
「初めまして、家主殿。私はソートレイナという。君に興味を持った」
「え、あ、どうもです」
手を差し出すと握手は返してくれる。素手にて汗がすごく、緊張しているようだ。
少年は席に座らず、手を離しただけで話し始めた。私の目を見ようとしていない。
「あ、あの。ぼくのどこに興味持ってくれたんですか？」
「美少年と聞いたからさ。私は男が大好きなのだよ」
少年の顔が明るくなる、そしていつのまにか私たちを囲んでたお化けたちも笑い出す。私は女みたいな少年が大好きなんだ。
「あ、ありがとうございます」

「ここは綺麗な家だね」
友だちになる、と言う目標は達成できそうだね。友だちになったあと、首都で英才教育を受けてもらいたいと思うが今日はやめておこう。
心を開くまでは雑談のみの予定だ。対人恐怖と聞いてから想像できていたが会話は私が振って反応してくれたら広げていく必要がある。
だが、それでいい。
この少年は1回も私の目を見てくれなかった、こうなると精神病とか神経症を感じさせる。病気レベルになると気の持ちようではなく脳がストッパーをかけている状態だ。
といっても素人なので勝手に想像しただけだ。
知り合いの言うとおり誠意を持って少しずつ解除していくことにしよう。
この日から数日、私はこの家で泊めてもらうことになった。お化けは例外なく良い奴で食事も一流コックのお化けがつくっている。それにしても少年は名を名乗らない、私の目も見ない、怖いのだろう。
しっかり話はしてくれるからある程度なかよくしてくれる意志があるらしい。
少年と生活しながらときどき学校の話を出してみた。楽しそうとは言うが行きたいとは言わない。少し時間がかかりそうだ。

それからしばらく少年やお化けと話したり動物と遊んだりしていた。
少年がリスを肩に乗せてるのをみたり、お化けと将棋をやったり、夜になるとネコが布団に入ってきたりと平和な世界だ。
ここまで平和だと心を開くのもはやい、会話する時間がみるみる増えていった。笑う時間は倍比例ぐらいだ。少しずつ目を見てくれるようになった。

最初の3日は別々に食べていたが、一度一緒に食べてから毎食一緒になった。ナイフとフォークは使っているけど我流のようで一般市民の食べ方だ。
5日目には少年とも将棋を始めた、お化けに鍛えられたらしくなかなか強い。勝負ではなく遊び目的なので駒をうごかして絵になるように遊んでいた。
だんだん将棋ではマス目が足りず囲碁に変更した。
最終的に作った作品はこの館のモザイク画だ、お化けたちが群がって何重にもなっていた。数百が碁盤を同時に見れるとは便利な種族だ。
この少年、結構多くのゲームをプレイしてるらしい。
首都に来れば部屋にこもってゲームばっかりしそうだね。引きこもったとしてもゴーストハウスは観光業界が欲してるから生活には困らないだろう。
到着後の屋敷は私が手配する。
こんな話をすると本気で考え始めた。
軽い話だけでなく深い話もしっかりしている。

こうして1週間たった朝食の時。巨大な丸テーブルに白いテーブルクロス、その他諸々王侯貴族風の食事がおかれていた。メニューはスクランブルエッグとバターロールとシーザーサラダとカフェオレだ。
お化けたちの仕事は綺麗だ、料理も部屋もかがやいている。
さらにうまい、腹がすごく求めているのでおかわりを頼むほどだ。私の食事は日を追うごとに増えていった。
朝食を終えたあと、いつもは私から声かけているのだが今回は少年から話し始めた。
「お姉さんの世界の人ってお化けを怖がらないんですよね？」
「うむ」
続きを期待したがとまってしまった。まだ恐怖がのこってるらし

い。それでも大きな変化があったのですごくうれしい。
名前で呼ぶとか話を広げるとかはもう少し後の段階だね。
顔はこわばってたまま固まっている、ただことばが出ないようだ。
少年は私たちの世界に引っ張り出されるのを待っているようだ。
心の中で派手な笑顔になる、表面上は優しい微笑みとした。
「実はうちの子もお化けに好かれているんだ。首都はみんな軽い性格だから楽しく暮らしているよ」
「それじゃあぼくも、大丈夫？」
もちろんだ、と言うだけではダメだろう。なぜもちろんなのか伝わらない。
少年は眉間にしわを寄せて不安そうだ、それでいて目を大きく開いて期待してるようだ。そして当たり障りない発言が残酷な優しさになることが多々ある。
さっきの本に”上手に”成長を促してくれる人が何よりありがたい”と書いてあった。
「あたらしい仲間と楽しく暮らすには１つ条件がある」
「え？」
瞳孔が縮まって驚きが顔に出ている。再び集まってきたお化けたちは固唾をのんでこちらを見てる。実態がないくせしてつば飲んでる音が聞こえ来そうだ。
私はバターロールをひとくち食べてためる。
３０回噛んで飲む込むまで、誰も私から目を離さない。
「私は君の名前を知らない。みんなで楽しくなりたいなら名前を名乗ってほしいね」
「あっ」
少年は赤くなってもじもじし始めた。
１週間も忘れてて恥ずかしくなったのだろう。
心が温かくなる系のほほえみをして少年の動きを待つ。照れ笑いしてる少年は抱きしめたくなるほどかわいい。国家に期待されてるのでなければ私の男にしたいほどだ。

お姉ちゃんお化けが美少年を元気づけている、すぐに深呼吸して晴れやかな笑顔にチェンジだ。
あまりに綺麗でキュンと来てしまった。いま、私の目を見ている。
「ぼくは天王晴彦！　ソートレイナさん、よろしくお願いします！」
「よろしく頼むよ」
この笑顔ならモテモテ間違いなしだ。
素質は最高、といっても今後も最大限のケアが必要だ。
それさえ気をつければうちの子と天才友だちになるだろう。
「将来楽しみだね」
と呟いたあとスクランブルエッグを口にした。朝食を終えたら引っ越しが始まる。
この日の天気は晴れ、親指を立てたような雲が私たちを祝福していた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7002q/

でっかい愛を見せるとき！

2011年2月6日16時10分発行